

## サタデー・パフェ「教室でこつこつ・ワクワク」

講師：中村 潤

1回目 2022年7月16日（土）

2回目 2023年1月14日（土）

場所 学びの森（亀岡）

学びの森のワークショップシリーズ「サタデー・パフェ」の中で、あえて、参加する子どもたちがいつも使用している、教室を会場に選んだ中村潤。1回目は、大きなロール紙やトイレトペーパーを、教室の中で縦横無尽に広げ、2回目は、「裁縫鳥」になったつもりで自分サイズの小さな落ち着く空間をつくり、自分が身を置く「空間」の変化を体験しました。

インタビュー:中村潤(アーティスト)

聞き手:奥山理子、阪本結(みずのき美術館)



左から中村、奥山、阪本

- 素材に紙を選んだのはどうしてですか？

紙の手触りって大体みんなちょっとは知ってる。『ピリッ』て破いたら気持ちいいとか、『くしゃ』としたら思った以上に音がするとか。あと、元々の場所にもあるものやし、大抵おんなじようなもんがどこで買っても揃うっていうのが大きくて。

例えば、アスクールでもバツと頼めるとか、古新聞集めたら凄い大きいボリュームできるとか。ワークショップでも、自分の制作でもそうやけど、一気にバツと大きくできたり、「おー！」って驚かせるような空間にするには、紙ってめちゃくちゃ楽ちんというか、すぐ作業に入れる素材なんですよ。

- 素材が「大きい」っていうのも今回のワークショップで特徴的ですが、大きさは重要？

そうかもねえ…。なんとなくですけど、四つ切りの画用紙を四角いまま渡されると緊張する。それは小さい時の図工でも感じたんです。紙面の枠内に構成しなあかんみたいな、ちょっと「うっ」ってなるみたいな感じ。それがあるから、なんか、描くために準備されてる紙のサイズはやめときたいなってのはある。

絵を描くワークショップの場合は、正方形の紙を渡すみたいなことはあったりするんです。正方形なのは、後で自由に上下を回転させて変えられるから。もしかしたら、私自身が制作途中で躊躇したり、失敗して「どうしよう」って感じの時に、「回して好きなようにしたらいいやん」って逃げ場というか、どうにかしようと思える道筋を残しておくような材料を選びやすいのかもしれない。

それは大きさも。自分で把握しきれへんサイズの方が面白いんちゃうか、何か起こるんちゃうかみたいな感じはあるかも。めちゃくちゃ小さいとか、めちゃくちゃデカいとか。

大きさがったり、素材が紙だったりっていうのは、親しみと意外性みたいなことを試しやすい。しかも今回のワークショップはみんなの普段の場所でやるから余計にね。

- 子供たちには、そんな中村さんの狙いが伝わったと思いますか？あるいは伝わって欲しいと思っていますか？

例えば「大きかったら普通の景色と変わるな」「紙やし破ることに躊躇しなくていいな」とかっていうのは、あくまでも私の想像だから、子どもらには関係ない。こう感じて欲しいと期待することはほとんど無い。「伝わったかな？」とすら、あんまり思わない。でも、「楽しく過ごせていたかなあ」は、すごく気になる。子ども達にとってなんかいつもと違う、あんまり普段しいへん感じになったかなあとは考えるけど、『こういうことを感じて欲しい!』は、私にとって目的じゃないからなあ。

作る経験と、時間と、それをみんながお互いを感じながら「あれ、なんかずっとやってはんなー」「不思議やなー」とか言うてみたり、作ってる気配がして見上げたら誰かがいて、「なんでそこで作ってはるんやろなあ」って各々過ごせたら、まあ大丈夫って感じかな。

- ワークショップをするうえでのモチベーションは何ですか？

なんやろうね。何を楽しみにワークショップを作るかと言ったら……「みんなちやうなー」っていうのが楽しいかも。とっちらかってる感じ。それが楽しいかな。一人で作るのももちろん面白いし、自分だけで感じることも面白い。でもみんなが面白いって思ってることや、お互いのいいなって思ってることに触れるっていう体験も面白いから。「作るの楽しいなー、全然ちごうたなー、はっはっはー」って、感じられるのが一番最高かなって思う。

- 中村さんは、ワークショップが始まる前の空間づくりが特徴的です。

今日の作業で触っていいものとか、今日使っていいものは明快にしておきます。「今日はこういうことをしたいんです」っていうことに関わるものだけを出しておく。会場に入ってすぐ、あらかじめ目に入ったら興味持ってもらえるかも知れへんし、話がしやすくなってすぐに作り始められる。作業の後半になってから使いたいものは、ある程度前半が進んでから次のタイミングで見せるようにするとかね。そんな風に、自分なりに、山場を何個か作るかな。テンポみたいなものっていうか。



## - 逆に、思うような流れにならなかった時は困ったりする？

準備段階でめちゃくちゃ考えるんです。色んな子供たちの色んな反応を想像する中で、その子のやりたいことと私の提案がずれちゃわへんかなーとかを、幾通りもシュミレーションします。失敗しそうなこともたくさん考える。こんな提案したら困っちゃう人がいるんじゃないかとか、ひとり一個ずつ作って持って帰ってもらおうと思ってたけど、「みんなで作っていいですか？」って言われたらどうしょ……みたいなことなんかも。何パターンもね。

例えば、この声のボリュームやテンポだって、どう伝わるのかなってことも。最初にどういう声かけがあったらいい流れが生まれるかなとかっていうのを、想定問答みたいにめちゃくちゃ考える。

でも一方で、絶対に想像通りにならへんって思ってやってるから、毎回緊張はするけど、謎にスッキリした状態で当日を迎えてる。結果、毎回何が起こっても「そうかあ」って思うだけやし、想定外で困ったってことはあんまり無い。私の想像しなかった展開が来たら「おうおう！そう来たか！！」って面白くなって、よかったよかったーって興奮する。

## - ワークショップって何でしょうね。

決められた工程を追っていく間に作品が完成するようなワークショップや講座はたくさんあって、「あっ、私も作れた！」って体験が心地よく感じて、参加される人は絶対いる。でも私は、用意されたスタート地点から想定したゴールに辿り着けても「やったー」とは感じにくいタイプ。

一人ひとり違う人が作るわけだから、個々のハサミの使い方ひとつ、楽しみ方ひとつで全然違う展開がある方が、作る人が主役のワークショップになっていいと思う。作り方やできた作品、作ってるその人がどんなことを面白いと感じるか、ということを中心にしたいなって思います。

それに、ワークショップってその場の体験だけになってしまうことがある。でも、今まで生きててやってきたハサミの使い方の癖とか、自分でも気づかない当たり前にやってきた事が生きることもあるのが面白い。

私がワークショップに対して思うことがあるとしたら、『作ること』に対して色々考えを巡らしながら作業している人は一人ひとり違う人間やから、その巡らし方も作業のやり方も当然一人ひとり違う、みたいなことに気づける時間でありたい、ということかな。

例えば、「まっすぐな線を引いてください」って言ってもさ、定規を使いたい人、ゆっくりフリーハンドで引こうとする人もきつーと思う。その違いがちゃんと出てきたらいいなって。

地域創生とかまちづくりをテーマに市民がグループディスカッションすることに関しても、「ワークショップ」って言うやん。美術のワークショップでも、作ることを通してなにか考えるきっかけにしてほしいってワークショップもあるやん。それらは、場所や企画によりけりなのかなって。企画しはる人によって、期待しはるもんがちゃうから当然全然違うものになると思う。

私は恵まれてて、割と好きにやってくださいって言ってもらえることが多かったので、別に何かと比較検討することもなく、私のやり方でやらして貰えててありがたいなあと思う。

しっかりとした「ワークショップ」っていうのがある分、私がやるような類のワークショップがほっといて貰えるというか、やらしてもらえるのかも……とちょっと思

ったりはする。「こうゆうのもやっていいですかね？」

みたいな感じで、またやれる機会があったらいいな。

